第7回　江戸川区長期計画審議会　議事録

日時：平成13年10月11日（木）午後1時30分～3時30分

会場：江戸川区総合区民ホール4階「401会議室」

＜議事内容＞

【松下会長】
　それでは、ただいまから第7回江戸川区長期計画審議会を開会いたします。まだ杉本委員がお見えでございませんが、始めさせていただきたいと思います。
　本日の欠席でございますけれども、岩楯委員、亀井委員、白木委員、杉委員、平田委員、間瀬委員の6名から欠席の届けが出ております。
　それでは、基本構想の素案の内容につきまして、長期計画立案委員会委員からご説明をいただき、これについて意見交換を行いたいと思います。
　本日は、第4章第2節「学びと協働による区民文化づくり」の立案を担当された東洋英和女学院大学教授の早瀬先生と区民委員の田中委員さんにご出席いただいておりますので、ご紹介いたします。

【早瀬委員】
　早瀬です。よろしくお願いします。

【田中委員】
　田中でございます。よろしくお願いいたします。

【松下会長】
　それでは、これより議事に入ります。では、早瀬先生からご説明をお願いいたします。

【早瀬委員】
　それでは、説明させていただきます。
　その前に、私がたまたま今大学でやっております専門分野とちょうど重なるところも多いことなんです。私が今大学でやっております専門というのは高齢者福祉文化論、地域福祉論、マスコミュニケーション論という分野でありまして、その高齢者福祉文化論、まあ老人福祉論という言い方もあるんですが、そういう分野でやっていることとちょうど重なりますので、若干話をさせていただこうと思うんです。
　今、ご存じのように、平均寿命は女性は84歳、男性も80歳近くなっていまして、いわゆる人生80年時代と言われています。実際には、第一線をリタイアするというか、退くのが大体60歳ぐらいとしますと、それから後、平均寿命まで生きるとすると、ざっと20年という期間があるわけですね。
　昔は、第一線をリタイアすると、いわゆる余生という言い方をしたんですけれども、今や60歳前後で第一線をリタイアして、それから20年ぐらいという期間になりますと、もう余生という言い方はできない。第

二、第三の人生という言い方もできるでしょうし、人間の一生の間の収穫期という言い方もできる。この２０年、最後のというか、第三、第四あるいは収穫期の２０年間をどのように生きて、どのように死んでいくと言うと極端な言い方ですけれども、実際問題としてはそういうことで、どのように最後の収穫期の２０年間を生きて、どう死んで、自分の一生を完結させるのかというのが、私が大学でやっておりますテーマというか、学生なんかとも一緒に勉強しているテーマは、最後の２０年、６０歳ごろから２０年ぐらいの間をどう生きるのか、どう生きたらいいのかということなんです。

ちょうどここにも当てはまるんですけれども、今は年金のことなんかも若干陰りというか、あるいは老人医療の問題なんかも出てきていますけれども、６０歳ぐらいから後、生活苦で餓死をするとか、食糧難で食べるものが全くないというようなことは、今の日本ではちょっと考えられない。つまり生活苦とか経済的なことで生きていくことが不可能ということはなくなってきた。かろうじてでも、とにかく生きていくことは可能だ。そうすると、一番大きな６０歳から後の生き方、生きがいというのか、心とか人生観によるんでしょうけれども、どのように生きるのかというのは、経済的というよりも精神的な面で非常に大きいと思うんです。

そういうところから、最近よく言われていることは、ここにも最初にあります「人生を豊かにする生涯学習」ということなんですけれども、６０歳から学習するというのでは実際問題としては遅いというのか、一応リタイアして、その後どういうふうに自分は生きていくのか。ボランティアをすることもいいでしょうし、あるいは何かの趣味を生かして生きるとか、いろんなことがある。ただ、それを６０歳から急にやるというわけにはいかんわけでして、生涯学習というのは、本来は６０歳からの２０年ぐらいというのが一番肝心な収穫期ではあるんですけれども、リタイアしたから急に何かをやるというのでなくて、ここに全部ありますテーマにもつながるんですけれども、もっと若いころからいろんな生き方、いろんな本来の自分の仕事以外のことに目を向ける必要がある。若いころからそういうことを積み重ねていく必要があると思うんです。

例えば学生ですと、大学なら大学の4年間が終わったら卒業する。卒業したら、もうそこで勉強はしないのかというと、実はそうではなくて、自分がやってきた福祉なら福祉、心理学なら心理学は、卒業してからむしろ勉強したり、もっと深めていく。これはどんな方面の勉強でもそうだと思うんです。だから、どこかで卒業するとか、ここで終わるということは何もないと思うんですね。

そうすると、私がやっている収穫期をどう生きるか、どう死んでいくのかということは、６０歳ぐらいから始まるのでなくて、もっともっと若いころから実は始まっている。極端なことを言えば、幼稚園、小学校、中学校、高等学校というようなころから、あるいは結婚して、働いている職場以外のことにどういうふうに興味を持つのか。

学生もそうですし、社会人になっても、本来自分のやっている仕事。従来はどうしても自分の仕事中心、６０歳ぐらいのリタイアしている人で、一番わかりやすく簡単に言うと、これまでは職場というものがあって、そこで人との社会的なつながりがあったんですが、リタイアしてしまうと、そういうこれまでのつながりが急に断ち切られる。全く断ち切られるわけではないですけれども、徐々に断ち切られていく。これまでの人とのつながりというものが全く変わってしまうわけですね。地域に中に入らざるを得ない。江戸川区なら江戸川区から大手町、新宿とかどこかへ行って、帰ってくるというような生活をずっと何十年間かやってきても、それがあるとき、そうでなくなる。あるいは自分の家で商売というか仕事をなさっていても、世代交代でリタイアすると、そこからはまた全然別のことになる。

そうすると、これまでの日本人というのは、欧米でもそうだったみたいですけれども、自分のずっとやってきた人生が終わると、仕事とかそういうものが即自分の人生のような感じになってきている。それで、仕事が終わると、今度は自分がどうしていいかわからない、これは２０年先のことを我々は考えて、みん

なで話し合ったんですけれども、今はそうだと思うんですね。２０年先はもっと違うというふうには考えているわけですけれども、とりあえずは、第一線をリタイアすると、人間関係ががらっと変わってしまう。つまりこれまであった横の関係がなくなってしまう。地域に戻っていく、あるいは家庭の中に入っていく。

家庭の人間関係も変わってきているわけですね。どう変わってきているかというと、学生にもよく言うんですけれども、家族というのは、一人の男性と一人の女性が結婚することによって、家庭というものができて、そこに小さな家族ができるわけで、そこから子供ができるというふうに、家族というものが増えていく。ところが、ある一定の年、２０年とか２５年たつと、子供たちはそれぞれ独立して、巣立っていく。そうすると、また最初の夫婦二人だけに戻る、これが家族構成の現実なわけですね。

この家族構成も、二人に戻るんですけれども、もっと言うと、二人が同時に交通事故とか飛行機でも落ちて死なない限り、二人が同時に死ぬということはない。最後は一人になるというのは、現実の家族のあり方だと思うんですね。これは世界どこにも共通している。家族というのは一人から始まって二人になるんですけれども、最後はまた一人になる、こういう人間関係がある。

そういう中で、会社で働いたり、あるいは自分の仕事を持っている人は、仕事上のつき合いとか仕事上の人間関係というのは横にずっと広がってきた。そういう人間関係が少しずつ変わっていく。結婚することによって家族が増え、それから子供ができるということで、変わるわけですけれども、これはまた最後に二人になり、一人になっていく。

そういう中で、どこに視点というか、目を見据えて生きていけばいいのか。例えば子供ができたら、子供を育てるという喜びとか楽しみ、生きがいとかいうことも一つあるでしょうけれども、これだけにかかり切っていたら、子供が成長してしまえば、もう何もなくなるわけでして、あるいは会社で幾ら仕事をして、幾ら出世して仮に社長になっても、このごろの会社というのは、社長も会長もいずれも定年制をしいていますから、いずれはやめないといかん。一つのポジションに永久にいるということは、江戸川区長であろうが、だれであろうが、ないわけでして、必ず現在の形態というのは変わっていく。そういう中で、自分はどういうところに価値を見出したり、あるいは横とのつながりを広げていくのか。

そのためには、仕事以外の自分の生き方、生きがい、楽しみ、そういうものを見つけていく。それをなるべく早くから、とりあえずは６０歳でリタイアした人たちはそういうことを求めないといけないんですけれども、２０年先ということを考えると、そのころはもっと早くから、つまり仕事だけとか、このことだけというような生き方は、多分２０年後にはもうだれもしていない、あるいはできないだろう。もっと横とのつながり、いろんな価値観も多様化し、例えば働くことだけが自分の生きがいとか家庭のためとかいうことでなくて、もっと余暇を活用するとか、いろんなことが出てくるだろう。

１番の「人生を豊かにする生涯学習」ということでも触れているんですけれども、勉強するというのは、最初にも言いましたけれども、学校だけが勉強の場ではなくて、むしろ学校を卒業してからのほうがいろんな形で勉強する機会が多い、あるいはせざるを得ない。ここにもありますように、就職とか、転職とか、いろんなこともあるわけですけれども、生きていく上での一つ一つの曲がり角とか、節目とか、いろんなところで何かを勉強したり、何かを得たりしていかないといかんことが多い。今でもそうなんですけれども、２０年後になれば、そういうことはもっともっと進んでいる。つまり生涯学習ということは、一番最後の２０年でなくて、４０歳とか３０歳とか、実は２０歳代ぐらいから、そういう自分の生き方をなるべく多様化していくということが必要だろう。

多様化する人生をすべての人が送れるようにするために、いろんな勉強をする機会、そういうものを設ける必要があるんじゃないか。設けなければだめではないか。いろんなことが必要だ。ここに、江戸川総合人生大学、これはあくまでも仮称でしょうけれども、大体大学という名前自体が２０年後にあるのかどうか。今ある大学も、私が行っている大学も含めまして、２０年後には半分ぐらいになっているかもしれ

ない。あるいは3分の1ぐらいになっているかもしれない。既に去年、大学の学部は全国の国公私立大学の中で4割近くが定員割れしてきているというような現状で、国立大学なんかも統廃合ということが言われていますね。例えば筑波大学と図書館情報大学は来年一緒になる。あるいは一橋大学とか東京の多摩に中心を置いている大学なんかも一緒になろうとしている。つまり大学なんかもどんどん変わってきていて、20年後にはいろんなことががらっと変わっているだろう。

例えば今就職試験なんかでも、最初にどこが始めたのかあれですけれども、学歴を問わない、どこの学校だということは一切問わないという時代に入りつつある。私は今から40年ぐらい前に新聞社に入ったんですけれども、私が新聞社に入ったころは、どこのだれでもいい、受験資格があるという、わりと開けたやり方だったんですね。普通、就職試験というのは、どこどこ大学という大学を指定して、そこの何々学部から何人推薦してくださいというのを各大学に出してやる。今はもうそういう時代ではなくなって、だれでもいい、要するにどこの学校だということは一切伏せて、試験をやる。人事部は一応書類を受け付けた段階ではわかるわけですけれども、面接試験をするときには、どこの学生か一切わからない。これは多分ソニーなんかが最初にやり始めたと思うんですけれども、今やそういうものがどんどん広がっている。だから、どこの学校のどういう学生かということは一切なく、22歳から28歳までの男女、国籍を問わないというようなやり方になってきている。そういうふうにどんどん変わってきている。つまり、どこの学校を出たというようなことが今はまだ何となく一生自分の肩書にようについて回っている、そういうものはだんだんなくなっていく。

そうすると、そういう肩書がなくなってくる20年後には、じゃ、何が必要かというと、結局自分自身が何を身につけているのか、どういうものを持っているのか、どういう考え方ができるのか、どういう価値を見出すのか、そういう個人のそれぞれの力とか考え方、人間力というのか、人間性とか、そういうものが問われている時代になっているだろうと思うんです。

そのためには、例えば江戸川区では、だれもが、いつも、何かを勉強したいと思うときにはできる、そういう機会がみんなに与えられている。60歳の人でも、40歳の人でも、時間があれば、どこへ行ってでも何かやれる、そういう機会をなるべくたくさんつくる必要がある。

つまり、ここにあります「生涯学習の裾野を広げる」、江戸川総合人生大学という名前ですと、何となくリタイアした人たちに勉強する機会をというような感じを、イメージとして僕なんかは持つんですけれども、ほんとうはそうではなくて、だれでも、例えば高校生が別の勉強をしたいと思って、塾に行くような形でそういうところへ行ってもいいというふうに、ありとあらゆる機会にありとあらゆる分野の勉強ができるところをつくるべきではないのか。当然できているであろうと僕たちは思っているわけです。人生を豊かにするというのは、絶えず何かを勉強し、本を読んだり、ここへ今日来て、下にも映画のあれがいっぱいありましたけれども、そういうありとあらゆる機会にいろんなものに接する機会を設けておくという必要がある。そういうことが結局自分を中からあれしていく。

私も大学で、女子学生ばかりなので、いつも言うんですけれども、幾ら化粧をしたり、外を着飾って、ブランド物を持っても仕方がない。中から自分の美というものを出さないとだめだ。大学の4年間で福祉をやろうが、心理学をやろうが、経済学をやろうが、そんなものは大して身につかない。司法試験に通る、あるいは外交官試験に通るとか、そういう資格試験を目指すのを別とすれば、あとは大学の4年間は教養を身につけるために来ているんだ。それ以外の、経済学部を卒業したからといって、あしたから経済学の専門家であるわけはない。教養を身につけるんだということを僕はいつも言うんですけれども、それはまさにここに当てはまることだ。教養と言うといかにも青臭いような、ちょっとあれですけれども、そうでなくて、すべての人がいつも何かを身につける。自分の知らないことを知るうちに、いろんなことに興味がわいていく。そういうことで、幅の広い、例えば仕事の上ではあまりうまくいかないけれども、別のこ

とで自分は生き方があるというようなこと、どんどん価値観の多様化とか、いろんなものを知ることによって、生きる幅というのができてくると思うんですね。そういうふうにすべきではないかというのが、1番目の「人生を豊かにする生涯学習」というのを考えたわけです。

2番目の「江戸川区の良さを活かしたボランティア」ということなんですけれども、「「ボランティア立区」の推進」というのもここにあって、お読みいただいたらわかると思うんですけれども、ボランティアというのは今や本当にあちこちで使われていて、いつごろからというと、ここにも書いてありますけれども、例えば阪神・淡路大震災のときもボランティアが活躍したとか、あるいはこの間の北海道の有珠山の噴火もそうだとか、三宅島とか、いろんなことが言われていますが、実際ボランティアというのは、ほんとうはもっと前にも、戦前、例えば昭和の初めに東北大飢饉というようなことで、東北の農家が米が何年もの間とれないということが起こった。そういうときに東北地方に物資なんかを持っていったような、その当時はボランティアという言い方をしていないんですけれども、そういう人もいた。あるいは、戦後すぐですけれども、福井大地震のときには、福井にそういう人が駆けつけた。そういうような記録もあって、ボランティアという名前でこそ、阪神・淡路大震災とか最近のことで言われるようになりましたけれども、困った地域にだれか困った人たちがいたら助けにいこうという、そういうことで起こっているわけですね。

もともと老人ホームなんかの形態も、地域のお寺とか篤志家がその地域の貧しい人たちを助けようということで、お寺の境内の一角にそういうものを建てて、東京都養育院というのは渋沢栄一という人がつくったわけですけれども、東京都養育院の起こりも、もともとは東京都の浅草とかああいうところにいる、浮浪者という言葉は今は使わないのかもしれないんですけれども、そういう人たちに場を与えて、そこに来てもらって、生活の場を与えるということから始まっているわけで、これも、広い意味ではボランティアだと思うんですね。もともとはこういうことがどんどん起こってきて、今やボランティアという名前はだれもが知っているようになってきた。

このボランティアも、実は高校生とかにいろんなボランティアをすることを強制するとかしないとかいうことで、いろんな論議になったりもしていますけれども、20年後にはボランティアというのは当たり前になっていると思うんですね。昔、日本では徴兵制というのがあって、実際に戦争に行かないけれども、20歳ですか、18歳になれば、1年間とか2年間だけ兵役にいく。兵隊を経験してくる。それが戦争のときには、アメリカでも今度予備役を招集しているそうですけれども、そういう徴兵制度というのが日本にかつてありました。その徴兵制度というのは僕は決してよくないと思いますけれども、それに近いような感じで、ボランティアというのは全員がやらないといかん。例えば40歳なら40歳の主婦は、少なくとも地域の老人施設に行って、半年間あるいは1年間ボランティアをやってください、そういう経験が必要ですというような時代に、20年後どころか、数年後に、ボランティアというのは全員がするという方向にいくと思うんです。ボランティアというのはいろんな形があって、何がボランティアかというのもなかなか難しいんですけれども、つまりボランティアをするというのは当たり前になってくる。

ボランティアというのは、ボランティアをされる側ももちろんありがたいわけですけれども、する側も、ボランティアをするということが一つのやりがい、生きがいみたいなのに通じるところもあるわけです。江戸川区では、20年後には、だれもが何かの形で、いつも時間があればボランティアをしているということになっているべきであろうと思うんですね。つまりボランティア立区というのは、江戸川区は全国に先駆けてというか、多分全国も同じように皆やると思うんですけれども、いろんなボランティアというものができているだろう。

そうすると、どんなボランティアがあって、どこに行って、どういうことをするようなことがあるのかがすぐわかるようになっている必要がある。ありとあらゆる種類のボランティアが一度にわかる、そういうふうになっている必要があるのではないかと思って、この「江戸川区の良さを活かしたボランティア活動」という

ことがあるわけですね。

コミュニティーの形成というのも同じようなことなんですけれども、要するにまちづくり、さっきも言いましたように、江戸川区に住みながら、中央区とか千代田区あるいは新宿区とかに働きに出ていく。夜、帰ってくる。だけれども、24時間江戸川区にずっといるという人たちも少しずつ増えていくわけですし、ずっと子供のときから江戸川区にいるという人たちもいる。江戸川区というのが東京の中で、あるいは日本の中で、どんなような位置にあって、どういうふうになっているのかということを、もっともっと知る必要がある。

私は今日、朝早く大学へ行きまして、11時半に東京駅まで帰ってきました。東京駅から丸ノ内線で淡路町まで2駅乗って、都営新宿線に乗りかえて、船堀まで来たんですけれども、ちょうど東京駅から30分で船堀まで着いたんですね。考えてみたら、すごい早く来れるわけで、一般の人というか、江戸川区以外の人が持っている江戸川区というイメージは全然違う。今地下鉄がすごく開通していて、私の大学の大学院があります六本木も、前は日比谷線しか考えられなかったんですけれども、今や大江戸線というのがあって、麻布十番駅のほうが、私の大学院、幼稚園とか小学校もあるんですが、そこには大江戸線のほうがはるかに近い。だから、どんどん変わってきているわけですね。

東京駅から30分したら、もう船堀のここへ来た。僕はここの建物の中に入ったのは初めてだと思うんですけれども、1階には本屋もあるし、飲食店もいろいろある。早く着いたので、うろうろしたんですけれども、ハトも、この辺にいるハトは、都会の、ここも都会ですけれども、都心のハトに比べたら、汚れてないようなハトで、ハトまで立派なのかと、本当にそういうふうに思ったんです。彩りのいい、キジみたいな色のハトが何匹かいまして、丸の内の辺のハトは何となく薄汚れて、気の毒な状態になっているんですけれども、江戸川に実際に暮らしている人にはこれが当たり前なんですが、もっと全体から見たら、全然違う。

そういう江戸川というものの独自性とか特長、例えば川がある街というのはいっぱいあると思うんですけれども、川と海にも面している街というのは、東京23区では江戸川区だけなわけですね。海にも面している。だけど、現実には江戸川区にお住まいの人たちも、直接海に面しているということは、日ごろあまりお感じになっていないというか、生活の実感としてはないかもしれないんですけれども、海にも面しているわけですね。そういうような江戸川区の特長というものはいろいろ知る必要がある。知って、これもまたボランティアとかいろんなのに通じると思うんですけれども、いろんなことが可能になってくると思うんです。

主に我々のところでは、そういう「人生を豊かにする生涯学習」、これとボランティアのこと、それから「創造性豊かな江戸川文化」というのは、江戸川の特長とかいろんなもの、海とか川、水、緑とか、そういうものに恵まれて、しかも都心から非常に近い。世田谷区とか杉並区なんかに行こうと思ったら、新宿からまた何かに乗りかえて、結構遠い。江戸川区のほうがはるかに近い、場所にももちろんよるんでしょうけれども、そういうふうに思います。

以下、「男女共同参画社会の推進」とか、「グローバル社会への取り組み」あるいは「安心できる消費生活」というようなところは、別に特に我々のところだけの問題ということよりも、全体の問題であろうと思います。

男女共同参画社会というのは、現実には一つも実現していないと思うんですね。つい最近の総理府の調査でも、例えば企業が総合職として女性を採用しながら、現実には総合職として扱っていない、あるいは総合職として雇用すると言いながら、雇用していない企業が半数以上あるというようなことが出ています。私の大学も女子学生ばかりですので、男女共同というのは非常に敏感というか、感じて、あれてしているんですけれども、なかなか男女共同参画社会というのはできていない。だから、いろんな角度

で、男性と女性はすべてが一緒だ。違うのは男が子供は産めないことぐらいで、これも将来産めるようになるのかどうかわからないんですが、それ以外は男女の差はほとんどない。体力なんかもそんなに差がなくなってきている。マラソンなんかでも、昔は男子が2時間半前後の記録が世界記録でしたね、つい10年ぐらい前は。それが今や女性も30分を切る。8分台という記録が出てくる。そういうふうに変わってきているので、男女がみんな一緒だということは、これは特に江戸川ということよりも、みんなが考えないといかんことだろうと思います。

以下、「5　グローバル社会への取り組み」とか、「安心できる消費生活」というようなことはここに触れてあるとおりですし、それから、お手元に行っております資料の1から6まで、これは、私が下手な説明を今しましたけれども、これを裏づけるというか、そういう支えにするということで、お手元に行っていると思います。それをお読みいただいたらいいと思います。

大ざっぱな説明の仕方ですけれども、また足らない点は私の隣の田中委員なり白井担当副主幹からお話しいただけると思います。以上です。

【松下会長】

ありがとうございました。

それでは、ただいまのご説明につきまして、ご論議をいただきたいと思います。意見並びに提案等がございましたら、お願いをいたします。

【竹内委員】

先生、ほんとうにご説明ありがとうございました。

何点かお尋ねしたい点がございまして、この中にも、「「ボランティア立区」の推進」ということで、区民がボランティアに取り組んでいこうという区の姿勢はよくわかるんですけれども、たしか昨年4月に区がボランティアセンターを立ち上げたと思うんですが、今、ボランティアセンターがどのような状況になっているのかというのがまず1点と、今、先生のほうからご説明いただいた中に、すぐわかるとか、あと、ありとあらゆるボランティアのいろんな機会があると思うんですね。例えば災害ボランティアという点もあるでしょうし、教育ボランティアとか福祉ボランティアとか、さまざまなボランティア活動が展開されていると思うんですけれども、基本的には、ボランティアですから、人を思いやる心が私は一番大事だなと思うわけです。昔の言葉で言えば慈悲の心というんですか、慈悲があって初めて、人を思いやって、自分も大変なんだけれども、大変な皆さんのために自分を犠牲にしてでもやってあげよう、そういう精神的なものが区民の一人ひとりの中に根づいていかないと、なかなかこのボランティアということはできづらい。今後、区民の一人ひとりの心の中に、思いやりの精神とか慈悲の精神とか、そういったものをいかに広げていくかという運動論なんですけれども、これをどのようにお考えになっているのかということと、当然それを進めていくには、小さい段階から、学校教育の段階から、ボランティアの推進のあり方ということを定義していかなければいけないなと思っているんですけれども、その辺のお考えが先生におありであれば、教えていただきたいなと思います。以上3点なんですけれども。

【早瀬委員】

私が言えることとすれば、今言われた心というんですか、ボランティアというのは、幾ら機会があり、場所を提供されても、やる気がなければ、やらないわけですね。さっきちらっと言いましたけれども、中学生とか高校生とかにボランティアをすることを義務づけるということが今言われていて、それはおかしいという考え方とかいろいろあって、現実にはまだ実現していないと思うんです。ボランティアという言葉が

そのまま当てはまるかどうかですけれども、例えば小学生でも幼稚園の児童でも、一緒に集団登校したり、あるいは集団で下校したり、学校の中、幼稚園の中に一緒に行って、何か困っている子供がいたりしたら、それを助けるとか、みんなでかばうとか、まず最初には家庭というのがあると思うんですね。自分よりも弱い者とか何かの形で遅れている者を、自分と同じようなところへ引き上げよう、本来福祉も一定のレベルに達していない者を一定のレベルに引き上げようということですから、そういうことはまず家庭でももちろんしつけるというか、教えていく必要もあるでしょうし、当然学校もあるでしょうし、それから地域もあるでしょうし、そういうところが事あるごとに、何か大きな災害があったら、そこへボランティアに行くとか、そういうことでなしに、神戸のボランティアでも、ボランティアが一部、本来のボランティアでないという非難もいろいろあったようですけれども、日ごろから、何か困っている者には手を差し伸べるという気持ちを植えつけていくことが必要だろう。

このごろは大学生なんかにも、入ってきた1年生の夏休みに、2週間以上どこかへボランティアに行く、それを必ず報告というか、レポートを出す、どこへボランティアに行って、何をしたのかを報告させるというようなことをやり始めている。私の学校でもやっているんですね。

どこへボランティアに行ったらいいんですかという学生もいっぱいいるわけですね、何をしたらいいんですかと。それからやりなさい。あなたは横浜市緑区に住んでいるのなら、緑区役所に行って、どこでもいいから行って、私は何かボランティアをしたいけれども、どうしたらいいか、どこでどんなことができますかということからやりなさい。何かボランティアと言うと、まだちょっとよそいきというか、あれですけれども、日ごろから助け合うということをあらゆる機会にみんなが知るということですね。

電車に乗っていても、例えば関西の阪急電車はシルバーシートをなくしたんですね。これはいろいろ話題になった。どうしてなくしたかというと、事改めてシルバーシートはここだというふうにしなくても、体の弱い人あるいはお年寄りが来たら、当然立って、そこへ座ってもらうというのが当たり前なので、シルバーシートから全然外れたところへ乗って、シルバーシートまで混雑していて行けないというような人もいるわけですね。シルバーシートそのものが要らん。それが差別である、区別である、廃止したと、阪急電車はそう言っているんですけれども、ただ、現実にはなくなって困るという人もいて、いろいろ論議を呼んでいるんですね。

昨日、私はたまたま大学から夕方帰るときに、ＪＲ横浜線で、十日市場というところから乗って、東神奈川へ出るんですけれども、乗ったらすぐ、落雷で京浜東北線は全部止まっているというんですね。それで、菊名で降りて、東横線に乗りかえてくれということで、振りかえなんですね。ＪＲが悪いということじゃないんですけれども、ＪＲの京浜東北線なんかだと、シルバーシートでも、若い人でもだれでもわりと平気で座っています。きのう、菊名で乗りかえて、自由が丘乗りかえでまた大井町へ出たんですけれども、菊名から乗った電車は、シルバーシートのところだけちゃんと空いているんですね。だから、電車によっても、マナーのいい電車、京浜東北線が悪いとか、昔は一に常磐何とかと、悪い電車のことを言われたようですけれども、電車によっても結構違うのかなと思ったんです。電車の中でシルバーシートが空いていたら、乗ってきた人も座りにくいですね、若い人たちは。やっぱり「えっ」という感じがする。だけど、平気で座っていたら、座るようになる。だから、日ごろのそういうことが必要じゃないかと、ちょっと長くなりましたけれども。

【松下会長】

課長。

【浅野企画課長】

ボランティアセンターについてのお尋ねでございますけれども、昨年の4月に企画課の中に組織として立ち上げてございます。従来、ボランティアに関する部分は、直接的には社会福祉協議会で福祉に関するボランティアの方々の団体等のいろいろな形での支援等をやってきたということがありますが、全体としては、区のいろいろな事業につきましても、地域の方々のご協力をいただきながら活動していたということがありまして、この部分についてもボランティア活動として位置づけることが可能だということもございます。そういう意味で、ある一つの組織でもって福祉だけの分野に当たっている、あるいは全体的にはそういういろんな活動があるということで、これを区としてこれからさらに発展させて、多くの方に参加いただきながら、どういうふうにボランティアに取り組んでいただけるかということを戦略的に考えていくべきだろうということがございまして、センターを立ち上げたという経緯がございます。

当然ながら、活動分野を、このセンターに中にいろいろな情報を入れて、地域の方に開かれた形で、いろんなコーディネートも含めた活動をやっていこうという形であったわけですけれども、なかなかその思いが進んでいるとは言いがたい状況ではございます。今現在、ボランティアセンターのほうにいわゆる登録という形で、ボランティアセンターに行けば、私のところの活動は全部情報はわかりますよという形になっているものは56団体ほどでございます。それから、個人で、ボランティアセンターに私はこういうことをやりますという形で出されている方が1，100人ぐいいらっしゃるわけですね。さっきの団体に入っている方が1，800人ぐらいいますから、3，000人ぐらいの方の状況をボランティアセンターである程度つかんでおります。

この情報をもとに、区民の方からボランティアをぜひ派遣してほしいとか、そういうような情報提供があったり、団体のほうでも、この時期、こういう人たちがいるので使ってほしいとか、そういうコーディネートの部分が今やっている一つの仕事だと考えております。

それから、ボランティアにいろいろな資格といいましょうか、研修を受けたり、自分で実技を受けたりして、ある程度の資質を持ってやるべきような部分もあろうかと思っておりまして、そういう方たちに対する養成みたいなものもやっていかなければいかんだろうということでございまして、例えば福祉の分野での手話とか点字、音訳といったところ、これはある程度の時間と年数、そういうものもかかりますし、そういう時間をつくること、機会をつくること、それからお金の問題もあるでしょうから、こういうことについての育成といいましょうか、こういうことをやっておるところでございます。

それから、いろいろＰＲの部分でも、地域の方に活動の紹介をしていきたいということでやっておりますので，できれば子供さんとか、そういう機会のある方に体験をしていただいて、施設に行っていただくとか、みずからサービスを受けるような立場での体験も含めて、やっていただくことによって、身近にボランティアでやるいろいろな機会があるということを知っていただきたいということで、いろいろな地域活動をしてやっているというところがございます。

このことにあわせまして、今年、たまたまボランティア国際年ということもありましたので、夏にフェスティバルを持ちまして、このホールの展示室を使いまして、7月にやりました。そこにはいろいろな形で、福祉だけではなくて、災害についてもそうですし、教育についてもそうです。いろいろな活動をされている方々に集まっていただきまして、活動の紹介をしていただいて、区民の方にもかなりの人数に来ていただいて、ある程度そこで紹介ができたと考えております。これは現にやっている活動でございますので、まだまだいろんな分野があるでしょうし、また目に見えてなくても、これから広げていかなければいけないものもあるだろうと思っておりますので、そういうところを研究課題としながら、これからそういうところにどうやって取り組むかということはボランティアセンターの大きな役割だと思っておりますけれども、この部分についての戦略、戦術がちょっとまだできていないというのが現状だと思っております。

それから、先ほどの登録していただいた団体なんかについての一定の支援という形での、少しばかり

実費等に関するような助成の制度も持っておりまして、活動しやすい仕組みというような形でやっていければというふうな形で、現状としては、おおよそそんな形でやっております。

【松下会長】
ほかに。

【小泉委員】
どうもありがとうございました。
まず最初に、人生を豊かにする生涯学習ということで、その機会だとか、環境等をこれから整備して、より充実をしていくという中で、仮称江戸川総合人生大学というお話がありましたが、一つは、まだ今の段階では、確かに高齢化と言いましても、長寿社会になっていることは間違いありません。今先生がお話しされたように、女性の平均寿命が84歳とか、男の寿命が80歳近い。しかし、65歳以上の占める全体の割合は、まだ12%ぐらい。しかし、10年後になりますと、18%ぐらいが65歳以上、これから20年になると、22%ぐらいになる、こういう中で、確かに大変勉強させていただきましたが、総合人生大学のような先進的な取り組みをして、既にこういうようなことを実際にやっているような地域とか市町村、参考になるようなところがありましたら、教えていただきたいことが一つです。
それから、これからの時代にふさわしいコミュニティーの形成ということの中に、町会・自治会の存在というものをここに書かれておりまして、私もそのとおりだと思っておるんですけれども、既に阪神・淡路のああいう大災害のときに、町会・自治会活動の非常に活発に行われたところは災害を最小限に防止することができたとかを含めて、特にこれから20年後に向けて、町会・自治会活動のあり方が非常に大事になってくると思うんですね。それは、コミュニティー形成の母体になります町会・自治会活動というものが、また一つは、今、お話がありました生涯学習のいろんな意味での結びつきになると思うんですね。
そこで、先生は一番江戸川区にお詳しいお立場でお書きになっていただいているんですが、今、江戸川区は、ここにも書いてあるように、非常に活動が活発に行われています。環境とか防災、防犯、青少年の育成あるいは婦人部活動、熟年者の活動とか、いろんな形で活動されているわけですが、一層これを充実させなければいけない。一つは、20年後の自治会活動、町会の理想の姿、そういう理想像といいますか、そういうことについてどういうようなお考えをお持ちなっているか。
それから、現実問題として、今、江戸川区には新しい、例えば先ほどお話のありました駅周辺にまちづくりがどんどん行われて、新しい住民の方々が増えてきております。町会・自治会への加入の問題が一つの課題になっているんですね。これは、今、申し上げたように、町会・自治会の活動の認識が、新しい住民の方々にどうアピールして、町会・自治会の中に入って、そして地域の一員として、一緒に地域づくり、まちづくりとか、生涯学習を中心として、そういう活動をしていくか。今の加入の問題が非常に難しい状況等、いろいろあるんですね。その辺についてのお考えを教えていただければありがたいと思います。

【早瀬委員】
私のわかる範囲で、最初に、総合人生大学的な先進的なことをやっているところがほかにあるのかというお尋ねなんですけれども、どこがどういうふうにやっているという具体的なことはあれなんですけれども、今一つは、大学のことばかり言うとあれなんですが、文部省から言われて大学のほうも考えて、つまり開かれた大学ということで、地域と共生、ともに生きようということが大学に与えられているあれなんですね。例えば私の勤務する大学なんかでも、横浜市とか神奈川県と共催で、生涯学習センターという

ものがありまして、そこで公開講座というのを年に4回以上やるわけですね。いろんな講座をそこでやる。そこへどんどん参加してもらう。だから、大学のある街、例えば江戸川区には大学があるのかどうか、ちょっとあれなんですけれども、たまたま大学のある街は、今必ずそういう公開講座というのをやることがほとんど義務づけられているんですね。ですから、そういうものが地域の住民との間でどんどんやられている。私は、この春までは京都の大学に勤務していたんです。東京から2泊3日で通っていたんですけれども、京都の大学だと、大学が多い街ですから、いろんな大学が一緒になって、京都大学と同志社大学、立命館大学、龍谷大学というような、京都四大学とかなんとかが一緒になって、お互いに得意な分野の講座を出し合おう、それを公開講座にして、京都市民あるいは京都市民以外の人に来てもらおうというようなことで、どんどんそれが進んでいっています。多分多摩地区なんかでもやっていると思うんですね、一橋とか津田塾とかいろいろ。一つはそういうやり方。

それから横浜市なんかもわりと進んでいて、横浜市は、大学とも一緒にやっている。それ以外にもいろんなやり方で、ＮＨＫの文化センター、そういうところと一緒になるとかやっている。そうすると、横浜は一応観光地でもありますから、ボランティアガイドというものが、鎌倉なんかもそうですけれども、どんどん増えて、そういうところから広がっていっている。そういうやり方をやっている。

江戸川区では、例えば２０年後のことを考えたら、どういうふうなあれができるのかということですけれども、例えばいろんな大学の公開講座みたいなものを呼び寄せるということも幾らでも可能だと思うんですね。今、東京駅前のビルの中に埼玉大学なんかが大学院を昼夜開校制という形でやったりして、私の行っている大学も、六本木に幼稚園から高等学校まであるんですけれども、大学院も六本木にあって、それは昼夜開校制にしているんですね。私も実は金曜日の夜、あしたですけれども、6時半から8時という講座を一つ持っているんですね。先週初めて行ったんですけれども、後期の学生、１８人が登録している。その１８人を全部調べたら、がんセンターの看護婦という人もおられたり、臨床心理士の人がいたり、一人変わっている人は、日本航空を定年でやめられた後、何か勉強し直したいということで、大学院に行くというと格好もいいし、夜ちょっと六本木の辺に行くというと、酒を飲みにいくか変なところに行くんじゃないかと思われるけれども、大学院に行っているというと、家にもいいといって、そのうちほんとうに勉強するというようなことで、昼夜開校制の大学院というのはどんどん増えてきているんですね。東京都立大学なんかはもともと昼夜開校制ですし、早稲田大学も一部そういうのをやっています。

そういうふうにして、江戸川区の場合もいろんなところからもっと引き寄せるということも可能だと思うんですね。東京駅から３０分で来られるわけですから、サテライトみたいなのをつくって、大学がここへ出てくるというようなことも可能だし、大学だけが何もそうじゃないんですけれども、それを一つの核にしたら、もっといろんなことを広げられるんじゃないかと思います。それが一つですね。

それから、自治会のことについて言いますと、２０年後にはそういう心配は僕はないと思うんですね。理想的に言えば、むしろ自治会の中心になりたい人のほうが多くなって困るぐらい、そういう人が増えるんじゃないか。私は実は千葉県の我孫子市というところに住んでいるんです。我孫子市に移って、もう25年ぐらいになるんですが、やっぱり新しい新興住宅地なんですね。新興といっても、２５年住んでいますから、もうそれぐらいの歴史があります。最初は、やっぱり自治会活動が全然だめでしたね。昔からいる我孫子市の市民といわゆる新住民と、子供の小学校の運動会でも祭りでも何でも違うとか、ばらばらでした。最近はリタイアしている人が僕らの住んでいるところも多い。つまり定年になった人たちがどんどん増えてくる。そういう人たちは、やることがないと言うと失礼ですけれども、とりあえずやることは自治会活動ぐらいから入ってくる。だから、どんどんそういうところへ出ていって、発言する。街の中へ入っていく。だから、２０年後に江戸川区で自治会に入る人がいないというようなことは全くなくなっているだろうというふうに、楽観的かもしれないですけれども、あるいはもっと四分五裂というか、ばらばらにいっ

ぱい分かれて、自治会という形態がなくなっているかもしれないですね。もっと別のボランティアごとの自治会みたいな、趣味とか、そういう単位のほうが自治会を凌駕するような形になっているかもしれない。ただ、そういう横のつながりとか自治会活動的なものは、多分盛んになることはあっても、衰えることはないと思います。

【松下会長】
はい。副主幹。

【白井副主幹】
僭越でございますけれども、ちょっとこの議論の中でのものをつけ足させていただければと思います。
まず、総合人生大学でございますが、おそらく私どもで議論したものは他都市にはまずないと思っております。それは、ここに「節目の生涯学習」というのがございます。今まで、子育てのところで子育て学とか結婚学、福祉のところで退職者学とかひとり暮らし学とか、そのようなことをここで学ぶんですというようなお話をさせていただきました。
さらに言いますと、先日、福祉のところで西垣先生がお話しになったと思います。例えば二十歳になれば、救命をみんなが江戸川区ではできるようにするんだとか、健康を学ぶんだとか、介護を学ぶんだとか、またボランティアを学ぶんだとか、ある意味では飲み屋学というようなお話もなさっていましたけれども、そういうような実学と、一つは節目のものと、さらに言いますと、最初はみんな幅広く習い、それで、一つのものを資格として取りたい場合は、今、早瀬先生がおっしゃったような大学と連携した中で、高い資格を取れるようなものまで考えております。ですから、もし子育てのプロフェッショナルになりたい方は、みんな子供を持てば、子育て学をまず学んでいただくということなんですが、今度は子育てを教える側にいきたいという方はさらに学んでいっていただくようなことまで、ですから、ある意味ではピラミッドみたいなものをここでは考えておりまして、そういうようなことはまず他都市ではございません。非常にこれは国からも江戸川区が脚光を浴びるものだと考えております。
次に、コミュニティでございますが、もちろん町会・自治会、先生がおっしゃったとおりでございますが、ここでぶどうの房の話が出ております。これからはテーマコミュニティといいましょうか、ITなどを使ったようなコミュニティといいましょうか、そのような地域を離れた形でのコミュニティというのもかなり出てこようかと思っておるところでございまして、そのようなものが順次できてくるということで、町会とはまた別の自主的なバーチャルコミュニティのような形のものができてくる。それが重層的に絡まっていくのではないかというふうなことを、ちょっとつけ加えさせていただければと思っております。

【松下会長】
小林委員。

【小林委員】
もう少しボランティアについてお聞きしたいのでございますが、ボランティア立区ということ、これは大変な理想だと思って、もしそうなれば、非常にお互いが支え合っていける地域ができるのではないかと思っております。それで、区のほうといたしまして、立区へボランティア活動を発展させるということをさっきお話しなさいましたが、具体的に何かありましたら、説明していただきたいと思います。
それからもう一つ、高齢者を支えるというところで、配食サービスというのを私どもボランティアでも行っておりますが、区のほうでも何食かやっていらっしゃると思うので、これの実態と、今後その栄養面とい

いますか、献立面で、２０年後、どういうふうな食生活を支える上でということが一つあります。それをお伺いしたと思います。

【松下会長】
副主幹。

【白井副主幹】
１番のボランティア立区へ発展させる具体策でございますが、ボランティアというのは、一度お話ししたかもしれませんけれども、ボランティアでも生涯学習でもそうなんですが、三つの階層に分かれると考えております。一つは、まず自らやっていただける方、それから、やる気持ちはちょっとあるんだけれども、どうやっていいかわからない方、それから、幾ら言ってもやらない方というふうに考えております。これから増えてくるのは、その上のまずやっていただける方と、それからやろうかなと思っているんだけれども、どうやったらいいのかわからない方ということだと思っております。
これからのボランティア立区、要はボランティアの方が活発な活動を区でしていただいて、区を支えるぐらいのものになるためには、ボランティアをまず自分がやりたい、何をやったらいいかわからないというときに、コーディネートするのが必要だと思っております。そのようなコーディネートの仕組みを、今はボランティアセンターの充実ということになろうと思いますが、そこへ電話して、まず自分はこの時間があいているんだけれども、何をやったらいい、子供が好きなんだけどとか、お年寄りとつき合いたいんだけどとか、そういうようなお話をしたときに、それに答えてもらえるような、そんな仕組みづくりが具体的には必要になってくるだろうと考えております。
より具体的なものにつきましては、申しわけないんですが、基本計画の中で、何を打ち出していけるのかという部分にゆだねさせていただきたいと思っております。
２番目の配食サービスでございますが、今日、福祉部の者がおりませんが、この前、福祉部の部長が言っていたんですけれども、まさに熟年者一人ひとりで好みも違いますし、歯の具合といいましょうか、そういうものも違いますので、まさにそういう方に合った配食の献立、今、区でやっていますのは、なるべく油物をやめようというようなことをやっているようでございますけれども、そのような一人ひとりに合ったことが理想とはなっているだろうと思っておりますが。

【松下会長】
小林委員。

【小林委員】
もう一つあったんですが、先ほど慈悲の心というお話がありましたが、私たちは小中学校に対して、高校もたまにはあるんですが、子供たちにボランティア体験というものをしていただきに行っております。感想文を読みますと、これから白いつえ、白杖と言うんですが、視覚障害者が持つそういうつえを見かけたら、席を譲りたいとか、何かご用があるでしょうかとか、勇気を持って声をかけたいとかという子供たちの声を聞くと、今、種まきをしていて、これから先、思いやりが少しでもいいから育っていってほしいという感じで、いろんな学校に行っております。
ところが、今日は教育関係の方がいらっしゃるかどうかわかりませんが、学校の先生方が大勢いらっしゃるので、まことに申しわけないんですけれども、わりと私たちは頭の中がフランクなんですね。やりたいといったら、もうそこへ行っちゃうという感じで、組織とかそういうことには疎いものですから、学校の先

生の考え方が、私たちから見ると、いろんな制約があって難しいんでしょうけれども、そこら辺で非常にやりにくいということがありまして、校長の許可、教頭の許可、それからそのほか学年主任とか、いろいろとシステムがあるんでしょうけれども、そういうところへ、教育委員会といいますか、教育課のほうから、通達と言うとおかしいですね。何か学校でやってはどうかみたいなことを、校長会で言っていただいているのかどうかということをお伺いしたいんですが。

【松下会長】
副主幹。

【白井副主幹】
まず、お答えにならないかもしれませんが、今日、指導室関係の者がおりませんので、申しわけございませんが、このことについては聞きまして、次回お答えさせていただきたいと思います。もう一つは、ご意見を指導室のほうへ伝えさせていただきたいと思います。
それから、私どもの長期計画は20年先のことでございますが、子供のところ、「未来を担う人づくり」のところはもうご意見等をいただいたところでございますが、この中では、「21世紀にふさわしい学校教育の推進」ということで、「笑顔で通える学校づくり」ということで、「奉仕体験、ボランティア体験などを充実させ」というふうに書かせていただいているところでございまして、非常に学校でのそのようなことを充実していこうというのはこの構想の中に入っております。

【松下会長】
藤居委員。

【藤居委員】
私からは、1つの点なんですが、17ページの「男女共同参画社会の推進」というところで少しお尋ねしたいと思います。事前にいただきました資料の中で、とても興味深かったといいますか、東京都が調査をした資料4の男女平等意識という意識調査の結果を見まして、男性が受けとめる男女平等への意識と女性が受けとめる意識がやはり違っているんだなと感じました。
私自身も仕事をしながら子育てをして、家庭生活を営んでいる立場としまして、この調査結果にありますように、子育てをしながら、育児が女性に非常に重くのしかかっているというか、負担になっているという部分、この数字からわかる点だと思うんです。それからもう一つ、先ほど先生がおっしゃいました、やはり企業の場においても、一般社会においても、女性と男性の格差がまだまだ現状はあるというような、そういった中で、私たちが活動している中で、女性の立場をもう少し大勢の方たちに理解をしていただくような場が必要だということの一つに、江戸川区の女性行動計画というものをずっと提案してきた経過があります。
それで、たまたま私が先日インターネットを引いていまして、今、女性行動計画という表現ではなく、東京都においても同じなんですが、男女平等参画条例とか計画とか、そういった男女平等、男女共同参画というような表現に最近はなってきておりますけれども、一つには女性問題を解決する、それから男女平等推進を図る、そういった自治体の姿勢が盛り込まれている計画が、今、東京都内で49の自治体にもうつくられております。49ということは、多分残りが江戸川区ぐらいなのかなという、その辺の状況もちょっとお尋ねしたいと思うんですけれども、そんなことを感じた中で、今回、この長期構想の中には、男女共同参画を推進するための計画をつくって、男女平等の意識づくりをしていこうというようなことが盛り

込まれているので、とてもうれしく思いました。
　まだまだ女性問題、今よく言われています家庭内暴力、夫からの暴力とか、それから職場でのセクハラに関しても、意識的な違いはあるにしても、やはりそういった問題が多くあって、これはほんとうに人権侵害であるという認識をだれもが持たなければならないのではないかなと思っております。そして、当然職場や地域の活動の中でも、もっともっと女性が参加しやすい応援をしていかなければならないと考えておりまして、この審議会は非常に女性が多く見受けられるので、こういった場においては、社会のほうもどんどん女性にこういった場に参加していただこう、そういった意識が見えるんですけれども、でも、まだまだ実態としまして、多くの問題を抱えているのではないかと思っています。
　そういった中で、江戸川区が、男女共同参画を推進するための計画というあたりのことについては、20年後の社会ということもあると思いますけれども、具体的にはどのように進めていくということで、ここに書かれているのかということをお尋ねしたいと思います。

【松下会長】
　副主幹。

【白井副主幹】
　今この素案を、意見、提案をいただいているところでございますので、ここにつくるというふうに書いてございます。ですから、これがいいということでしたら、こういうことになっていくだろうと思います。それで、今10年の基本計画をつくっている最中でございまして、その中でこの計画をどのようにつくっていくかということをこの審議会にまた出してまいりますが、明らかにしてまいりたいと思っているところでございます。

【松下会長】
　藤居委員。

【藤居委員】
　わかりました。私の意見になりますけれども、計画だけがすべてではないと思いますが、ぜひ多くの方々にわかる男女平等に対する江戸川区の姿勢をはっきりと打ち出していただくものをつくっていきたいということを希望したいと思います。制度がすべてというわけではないんですけれども、女性がこうした意識調査などで感じている部分などは、やはり社会の制度が変わることで随分変わっていく部分があると思います。例えば専業主婦が非常に優遇をされている130万円の壁というものがありまして、社会保障制度が専業主婦にとっては非常に優遇措置になっていますが、それがほんとうにいいのかという議論については、逆に、女性がいわゆる男性と同じような仕事につきにくい状況をつくり出しているということが一面あって、そういった法律的なものについては国の問題ですけれども、その問題を江戸川区がとらえて、できるところを変えていく、そういったあたりはとても大事な問題ですし、これからの社会は男性も女性も同じように子育ても仕事も担っていく社会になりますので、その辺の計画に関しては、ぜひつくっていただきたいということを提案しておきたいと思います。

【松下会長】
　瀬端委員。

【瀬端委員】
私も、重なる部分も大分あると思うんですけれども、意見や質問をさせていただきたいと思います。
一つは、先ほどご質問があった、最初の先生のお話で非常に多様化というか、２０年後といいますか、これからの長期計画に盛り込むべき課題、特に６０歳以上の今後の人生というか、そういうものについての位置づけなんかの話は非常に有益でした。
同時に、先ほどもご質問がありましたけれども、総合人生大学というのが、仮称ですけれども、江戸川区の一つのシンボル的な内容で提案されているかなと思うんです。さっきの話で大体イメージがつかめつつあるかなという感じですけれども、今現在でも、例えば、全然性質が違うと思いますが、熟年者のカルチャー教室、それから福寿大学、そういうようなものも現状で取り組まれているかなと思うんです。そういう事業とこの江戸川総合人生大学といったものの関係というか、発展の方向性というか、そういうことがどうなるのかなということもちょっと教えていただきたいということ。
もう一つは、江戸川文化の創造ということがありまして、これもなかなか具体的なイメージを持つのは難しいことかなと、ある意味では私たちの営み、取り組み、すべてが文化ということも言えるのかなと、カルチャーということで、いろいろな生産活動そのものも含めて、そういうことが言えるのかなと思うんですけれども、江戸川的な、先ほどの先生のお話でも、伝統文化とか工芸とか、そういうものを生かした江戸川文化というようなお話だったかなと思うんですけれども、もうちょっとイメージがあれば、どういうものを江戸川文化の創造として育んでいこうとするのか。
何か箱をつくればいいということじゃないんですけれども、最近よくテレビで、三鷹にスタジオジブリの博物館みたいなのをつくったとか、何であそこにそういうことなのかなというのはよくわからない面もあるんですが、各地域で努力して、自分たちの文化をつくり上げていくことなのかなと思うんですけれども、そういったイメージをどういうふうに考えたらいいか、お考えがあれば教えていただきたいと思います。
最後は、今、お話があった男女共同、平等の参画事業の問題なんですけれども、江戸川区は、率直に言って、こういう長期計画、基本構想の中で男女平等の問題について位置づけてきたということで、常に執行部からはそういうお答えで来たわけですけれども、そのことを独自に取り上げて、独自に取り組んでいくということが、私は江戸川区の行政の側面としてはちょっと遅れてきた面があったんじゃないかなというのを率直に感じています。
ただ、こういった区民ホールをつくって、その中に女性センターができて、相談コーナーが設けられて、非常に活発な相談やいろいろな機能が発揮されて、職員の方も頑張っていただいて、積極的な役割を果たされるようになってきたということは非常に評価しているわけですけれども、もう一つ、今おっしゃった基本的な男女平等問題についての計画の問題とか、それからそれを取り扱う区としてのセクションの問題、幹部職員の問題、こういった審議会への女性の参加の比率の問題とか、いろんな角度から男女平等という問題は、先生もおっしゃったように江戸川区でどうこうという、江戸川区だけの問題じゃないんですけれども、江戸川区の取り組みでこれを推進して、先進的な役割を果たしていくというか、いただいた資料を見ましても、私たち男性の責任という問題もあるのかもしれないんだけれども、意識が大分違うということや、まだまだ世代によっての認識の違いもあるかもしれないし、男女平等の遅れといいますか、これは社会的にも、認識の面でも、いろんな側面で感じるわけですね。だからこそ、独自の努力が相当費やされなければならないのではないかというようなことを感じているわけですけれども、そういった点について、三つ、たらたら伺いましたけれども、お考えがあったら、教えていただきたいと思います。

【松下会長】
副主幹。

【白井副主幹】
1番と2番は私のほうからお話しさせていただきます。
まだ、人生大学につきまして、例えば普通のカルチャー教室とか福寿大学を含めて、すべてで人生大学と呼ぶか、それともカルチャーや福寿大学を人生大学の衛星、サテライトとして持つかというような議論にまで至っているところではございません。おそらくこのようなことを話していきながら、これはそんなに簡単にできるものではございませんので、徐々にいろんなご意見をいろんな方からいただきながら、つくられていくのではないのかなと思っているところでございます。
2番の江戸川文化の創造は、逆に言いますと、本当にご提案いただくとありがたいんですが、この議論の中でも、江戸川区の文化とは何だろうということが相当議論になりました。一つは、形でなくて、人のつながりの文化ではないかというお話があったのも確かでございます。街の個性や文化というのは歴史や住んでいる人の住まい方、暮らし方というところから生れてくるのではないかというような議論もあったわけでございます。具体的に言いますと、例えば朝起きて、親水公園を歩いている区民の方が本当に多くいる。野球場で少年たちが野球にいそしんで、それを教えている大人のボランティアたちがたくさんいる。もちろんこういう文化の施設におきましては文化活動をしている何万人もの人々がいるような、そんな暮らし方自体、江戸川区の区民の皆さんの生活を見ていると、本当にうらやましいなと思えること自体が江戸川区の文化ではないかというような議論はございました。
ただ、江戸川区の文化の象徴として、今三鷹のジブリの話をなさいましたけれども、これだというような資源はいっぱいあると思います。先ほど先生がおっしゃったように、海がありますし、川に恵まれております。人材は多く、まさにいるんですが、一つの言葉をもって、これが江戸川区の文化だというのは、実のことを言って、ここでは明らかになっていないわけでございます。ですから、それを江戸川文化の創造というような形にさせていただいたというのが今のこの構想でございます。ですから、そのような形で、「他にはない江戸川区の特長と資源を活かした「江戸川文化」を創造し」というのは、今のような議論を踏まえて書かせていただいたところでございますので、逆に、このようなことがいいんじゃないのか、これを売り出していったらどうなんだろうかというようなご提案をいただけるとありがたいと思っております。

【松下会長】
早川課長。

【早川児童女性課長】
3点目の男女平等参画についての計画でございます。基本構想の中には、「男女共同参画を推進するための計画をつくり」と書いてございますので、これから江戸川区の中で男女共同参画の社会を実現していく上での指針ということで、これを区民の皆さんにも具体的な姿でお示しするという意味で、この計画については非常に大きな意味があると考えております。
ただ、具体的にどのような形の計画にしようかというところは、これからいろいろご議論いただきながら決めさせていただきたいなと思っております。具体的な策定のスケジュール等々につきましても、これから基本計画の中でも具体的に示させていただければと思っておりますけれども、まずこの計画をつくるに当たりまして、いかに実効性のあるものがつくれるかというところ、ただ単にシンボリックな意味での計画というわけにもいかないと思いますので、江戸川区としての特色は何か、そういったところを、ある意味で実態をきちんと踏まえた上での計画をつくっていかないといけないかなと思っておりますので、多少

時間はかかるかもしれないですけれども、地に足のついたような形の計画にしていきたいなと考えております。

【松下会長】
北川委員。

【北川委員】
１点だけ、済みません、端的に。先ほどらい、江戸川文化という話が出ていますけれども、ここの箇所で表現することが必要かなという提案も含めて、いろんな議論がこの中であったかと思うんです。いわゆる江戸川文化と表現されている地域コミュニティー、地域文化、江戸川区らしさ、伝統工芸等々を含めての、こういう意味合いでの文化、これはこれで非常に大事であり、江戸川区らしさをまさにこれから花開かせていく大事な項目だと思うんですが、もう１点、出だしのところで「高度な芸術活動」云々と出ています。いわゆる一流の芸術、一流の文化、一流の芸能、そういうものに区民が接していく場面をどうつくっていくかということも一つの大事なことであろうと思います。それから、何よりも江戸川区民の中から、後々海外へ飛躍できるような一流の芸術家がそこで育まれ、出ていく、そういう環境づくりという点、これも大事な要素だと思うんですね。つまりここで言うカルチャー的な文化と、非常に高度ないろんな意味での文化、芸術活動、そういう部分がちょっと表現し切れていないかなと思うんですが、そこら辺の論議があったのか。なければ、そういう環境づくりも大きな部分ではないかなと思うんですね。
かつての行政中心の長期計画というのは、箱物ではないけれども、そんなことが一つの理想にあって、代々、前区長もおっしゃっていたように、江戸川の地域性の中に、例の総合文化センターができたときに、非常に文化の象徴としての思いがあったわけです。現実に、その中で今いろんな芸術活動等々の一流の方も見えて、我々も楽しんでおりますけれども、そういう意味での箱物もできた。そこで、どう一流のメンバーを呼んで、区民にそういう情報を提供できるかというのは大事なことだと思います。
話は違いますけれども、江戸川総合文化センターができた後、墨田がトリフォニーホールをつくったり、葛飾がシンフォニーホールと、名前はなかなかの表現なんですけれども、決してその文化センターに当区民ホールは負けないわけで、そういう施設を利用してどうつくっていくかというのは非常に大事な要素ではないかと思うんですね。
話は違いますが、我々議員も、文芸議連ということで、いろいろそういう高度な芸術に接しようと、そのような会をつくって、また区民の中で頑張っていらっしゃる方を研修していこうというようなこと、区としても文化賞等々、そんなこともやっていますけれども、我々の年になって急に目覚めても、もう追いつかない部分がありますので、これから２０年後の江戸川区を語るとなれば、そういう後々の人材をつくる意味での環境づくりも大事じゃないか。そういう面での文化芸術活動、場合によってはそういう人たちに対する助成とか、その環境のためのいろんな支援活動とか、激励の場面をつくるとか、そんなことも大事じゃないかと思います。その点、どんな論議があったか、なければ、こんなものを盛り込んだほうがいいのではないかと思いますので、よろしくお願いします。

【松下会長】
田中委員。

【田中委員】
今のご質問の中の箱物ということで、実際面、委員会の中で相当話が出てまいりました。やはり超一

流のものを江戸川区の中につくったらどうなんだろう、いろいろな劇場とか、そういうのをつくったほうがいいんじゃないかという話も出たんですけれども、これから20年ぐらい経ってきたときに、多様性と至近性と交流という話から見たときに、どちらかというと、そういう施設が六本木にあるとか、東京にあるだとか、どうしても人の流れとしてそういうところに行ってしまうのではないだろうか。しかも、箱物文化といった場合に、そこで芸術を見るだけではなくて、その前後に一緒にどこかで買い物をしようとか、食事をしようとか、これがどうしても重なり合ってくるときに、一つだけ立派な芸能ホールがあったところで、これからどういうふうな価値が生れるんだろうか。それよりも、もっと箱じゃなくてソフトのところに力を入れていったらどうか、このような話が出たと思います。そして、そういう文化人とか芸術活動をする人たちの助成とか援助、こういった面を強化していく。ある面では要するにハードなところでの支援ではなくて、ソフト面での支援が大切ではないか、このようなことで、たしかこのような文章になったと思いますが、その辺、副主幹さん、いかがだったですか。

【松下会長】
副主幹。

【白井副主幹】
今、田中委員からお話が出たとおりでございまして、それをこのような形の区民一人ひとりの主体的な活動を最大限に尊重しつつ、「多様な文化活動ができる環境づくり」というようなこととか、今お話しになりました「世界的に活躍している区民、区外の人材」などによりまして、ここでは表現しているつもりでございますが、ここは意見をいただいたり、提案をいただく場でございますので、そのようなことで書いてはございますけれども、ご意見、ご提案としていただいておきたいと思っております。

【松下会長】
小暮委員。

【小暮委員】
さっき小林委員のほうから学校に対する意見がありましたけれども、私も、確かにこれまでは、学校というのは学級崩壊や何かでいろいろ問題があるけれども、実際どうなっているんだろうというふうな関心を持っておりました。
ところが、先日、学校長のほうから、地元の小学校を学校と地域の人たちによる語る会というのをやるから集まってくれと言ってまいりました。そうしましたら、第1回なので、今回は大体学校からの連絡事項あるいは報告が多くなると思いますといって話したことによりますと、小学校5年、6年ぐらいになりますと、ピアスをしたり、茶髪の子あるいは携帯を持った子が数人いるそうです。確かにこういう子供に対しては、周りの子供さんがいろんな目で見ているんですけれども、今、特に問題はないのでずっと様子を見ているんですが、一つお年寄りの背中を流す派遣隊というのをつくったそうです。そして、何人応募してくるかなと思いましたら、9人の子供さんが応募してきた。男女9人ですから、おそらく5人、4人とか、そんな組み合わせだと思いますけれども、この方に、特別養護老人ホームのお年寄りのところへ行って、背中を流すことをさせたそうです。
そうしましたら、学校も、地元のＰＴＡの方も、養護老人ホームの方も、非常に関心を持って見ていたところが、実によくやってくれる。明るく、楽しく、お年寄りが非常に笑顔になって、それを受けていたということで、それを校長先生が朝の朝礼で皆さんに話したそうです。そうしましたら、「それなら、僕もやる」

「私もやる」という方が非常に増えてきて、これは持っていき方によったら、ボランティア精神の教育あるいは発揚にもなるのかなというわけで、今、学校ではこういう面にも力を入れていきたいと思いますという話がありました。ボランティアというのも、この辺から皆さんにいろいろ関連した話を教えたり、経験を話せば、子供のころから伸びるのかもしれないといういい話を聞いたので、私どもはほっとして帰ってきました。ですから、ぜひこの点は、小学校の低学年のころから伸ばしていただければありがたいと思います。

それからもう1点は、さっき総合人生大学の構想の話なんかが出たんですけれども、確かに20年後にはいろんないい構想が出てくると思いますが、私はもうちょっと、そんな20年という長期じゃなくても、中長期あるいは短期でもいいから、その辺からでも手がけてもらったらいいかなと思うのは、今江戸川区には中央図書館という立派な図書館ができました。そこへ行ってみますと、子育てしている若いお母さん方から、70代、80代の方まで、いっぱい本を読みにきております。ところが、その方に聞きましたら、環境がいいからここでじっくり本を読んでいたいんですけれども、子育てのお母さんがどうしても子供を一人、二人連れてくるというわけですね。その方が、子供さんがワアワア騒いで、その辺を駆け回っているんですけれども、それに対して何ら注意もできないし、周りの人も、あの子供さんをどこか託児所みたいなところで面倒を見てくれれば、お母さん本人も、あるいはそこに来ている70、80歳のお年寄りの方も楽しく本が読めるんだけれども、この辺も何とかならないものだろうかと。これはあまり長期の話ではありませんけれども、できたら早目にお願いできれば、文化面あるいは生涯教育の面でお役に立つかなと思いまして、要望としてお願いしたいです。以上です。

【松下会長】

今、小暮先生とか小林委員さんからお話があったボランティアの育成ですか、あれは、たまたま竹内さんも文教委員ですから、指導要領が変わって、これからかなりそういう部分が多くなります。むしろ普通の時間が、英語が3時間ぐらいとかかなり少なくなるのはおかしいなと思うんですけれども、学習よりもむしろそういうことに力を入れるようなことになりつつあるようですね。

あとは、学校評議員会のお話じゃないかと思うんですね、小暮先生のお話は。

【小暮委員】

そうです。

【松下会長】

ですから、そういうところで実際に地元の、最初は今お話のあったように、向こうからの一方的な報告事項かもしれませんけれども、これからはおそらく地域から上げていくようなことになると思うんですよ。それを学校が受け入れて、それを今度は教育に生かすというふうなことになると思いますので、かなりボランティア的な意識というのは、これからの子供というのは相当されると思うんです。それをちょっと感じましたので。

【小暮委員】

2回目はそうなると思います。

【松下会長】

そうですね。松井委員、お願いします。

【松井委員】
私は、ボランティアといっても、新聞とかニュースで報道されること程度しか知識がなくて、もっと早く質問すればよかったんですけれども、ボランティアというのがどういうものなのか、一般的に知られていることぐらいしかよくわからないんですね。というのは、福祉とか教育とか災害という領域があってというお話があって、ああ、そうか、そういうふうに区分けされるんだという程度の感覚しかないんです。
先生が先ほどから、20年たったら、みんながボランティアをやっているのが当たり前の世の中になりますよとおっしゃられたんですけれども、具体的に今、福祉とか教育、災害ということ以外に、どんな分野にボランティアの活動というのがあるんでしょうか。それから10年後、20年後、どんな分野にボランティアが広がっていくことが期待されるんでしょうか。あともう少し、例えば福祉だと、介護サービスが入って、業者がいろんなことをしますね。もう片方には福祉ボランティアというのもありますね。そこの関係というのがどういうふうになっていくとか、それからもう一つが、済みません、わからないことだらけで。交通費とかの話なんですけれども、家の近所の老人ホームに行くとか、子供たちのところに行って遊ぶというと、これは歩いていったり、自転車で行ったりで、ただで行けますけれども、災害ボランティアで遠くに行くとか、災害でなくても、ちょっと遠いところに行って、スポーツの指導をする。バス代、電車代、ガソリン代がかかるというときの報酬というのはどうなるんでしょうか。やっぱりボランティアと言うからには、ほんとうに無報酬なんでしょうか。済みません、早く聞けばよかったんですけれども、わからないことだらけで。
もう一つ、これは全然別なんですが、先ほどから出ている子供たちの生涯学習とかボランティアの話なんですが、今うちの娘が中学生で、朝、ラジオの英語放送を聞いているんですね。たまたま先週から今週にかけて、留学生が向こうの中学校の生活について話をするコーナーがあるんです。放課後どんなことをしているというと、日本の学校だと、クラブ活動というのがいっぱい出てきますけれども、子供たちは学校を通してではなくて、家に帰って、学校の授業の一環とかじゃなくて、一個人として近所の子供たちに勉強を教えるボランティアをするんだという話が出てきて、えーっ、そんなことするんだ、ちょっと考えられないなと思ったんですね。先週か先々週に、藤居委員が、学齢期の子供たちの話のときに、中学生の居場所がないという話があったんですけれども、そういうときに、図書館とか児童館で、ボランティアという偉そうなことじゃなくて、勉強を教えたりとか、先ほど小暮先生がおっしゃった子供の相手をするとか、そういうふうな展開というのを行政のほうではどんなふうに考えていらっしゃるのかなと、先生と行政の方と、両方に教えていただきたいんですが、お願いいたします。

【早瀬委員】
僕のほうで言えることは、最初に、ボランティアといっても、ボランティアには有償ボランティアも無償ボランティアもあるということですね。つまり一切何の実費ももらわずに、一方的に自分がすべてを提供するというボランティアもあれば、それから、今言われた交通費とか実際にかかったものについては受け取る、そういうボランティアもあるんですね。ですから、ボランティアそのものは一方的に一切無償で何かをするということではなくて、有償のボランティアもあるということが大前提だと思うんですね。それは、その場所、場面、例えば神戸の阪神大震災のときでも、無償ボランティアがもちろん多いんですけれども、地域とか場所とかによっては、有償のボランティアもあり得たわけですね。それはいろんなボランティアがあるということ。
それから、どれぐらい、どんなものがと言われると、僕もちょっとここで具体的にというのはなかなかあれで、さっき言われている福祉とか、そういうわりとわかりやすいものはありますけれども、今、言われた

勉強を教えることとか、一緒に遊んだりすることとか、例えば武蔵野福祉公社なんかがやっているやり方は、お墓参りに一緒に行くとか、旅行についていくというようなこともボランティアということで、武蔵野の場合は有償ボランティアです。お墓参りに行くときは、鎌倉に行くとしたら、往復の交通費は出してもらう。だけれども、一緒に連れていってあげるというのかな。歌舞伎座へ行って、歌舞伎を見る。歌舞伎を見ながら、歌舞伎をちょっと解説するというようなことも含めて、歌舞伎を知っていないとできないわけですけれども、そんなこともボランティアですね。本を読むこともちろんそうでしょうし、ボランティアというと、普通、災害地に行くとか、福祉とか、そういうことがすぐ思い浮かびますけれども、ありとあらゆることがボランティアの対象になると思うんですね。それを望んでいる人がいて、望んでいる人に何か手を差し伸べるということがボランティアという形ですから、それはあらゆる場面に出てくるだろうと思います。僕のほうの基本的なところはそれで。

【松下会長】
副主幹。

【白井副主幹】
ボランティアの定義のようなお話だと思うんですけれども、広辞苑を引きますと、このように出てまいります。ボランティアというのはもともと義勇兵の意味だったようでございまして、志願者とか奉仕者とか、「自ら進んで社会事業などに無償で参加する人」と広辞苑ではなっております。
ただ、先生からお話がございましたけれども、今のボランティアの定義というのは、ちょっとこれとは変わってきております。自発性に基づく行為であって、慈善や奉仕の自己実現、ここで「明るく楽しく」というようなことを私どもは入れさせていただいたんですが、相互扶助とか互酬性といった動機に裏づけされた行動を行うというふうなものでございますので、当然交通費だとか、また有料だとかいうことだって出てくるわけでございます。
それをもっと広げていきますと、さっき小暮先生がお話しになりました、子供たちが背中を流します。子供たちはボランティアをお年寄りにしているわけです。でも、お年寄りはボランティアとして子供の教育をしているわけです。双方向性ということですと、もはやそういうふうにもとれるというような話さえあるぐらい、広がりをもっているところでございます。そのようなことをもって、今ボランティアというようなとらえ方をしていることが多くなってきているということでございます。
その他、具体的なものにつきましては、担当課長のほうからお話をさせていただきます。

【松下会長】
企画課長。

【浅野企画課長】
およそ何でもあるんだということで、私が最初申し上げたときにも、今、現にやられていること以外にもいろいろ可能性があるだろうということをちょっとお話ししました。あらゆる分野でこれから可能性が出てきているということだと思います。
現にやっていることで、さっき幾つか挙がっておりますけれども、例えば国際交流みたいな形で、日本に来たときに、ホームステイの形で受け入れるとか、通訳をやるとか、そういうボランティアもありますし、例えば子供をキャンプに連れていくとか、そういうことも当然あるわけですし、それから大工さんがそれぞれの家庭の簡単な修理はみんなやってあげますよと、こういうことをやっているとか、公園の管理

をやるとか、環境の問題とか、いろんな形で現に行われているところでございます。２０年後にどういうところにあるかということ、先ほどから言われているように、ほんとうに身近なことであり、困ったこと、そういう部分でだれかにちょっと助けを借りたいなということは既に広がりがあるだろうと思いますので、そういうところに身近に、だれでも、いつでもというような形でもって、時間があいたらやってあげるよということから始まるような、そういう社会になっていくのではないかなと思っているところです。

それから、先ほど福祉ボランティアと介護ということがありましたけれども、介護保険という制度の中では、これはみんな事業所ということになるんですね。主体が、例えばＮＰＯ法人が介護保険の事業所になることもできるわけですが、その保険の中でやっていることは、これは事業としてやっているわけですね。母体はＮＰＯ法人ですから、それ以外のところで、自らの主体的な別の取り組み、保険の中で全部介護が賄えるということではありませんので、保険から外れる方へのいろんなサービスとか、そういうところに自主的に参加していくというような形でのいろんなやり方があって、ですから、基本的に決まった制度で足りない部分を補おう、そういうところに取り組んでいくような、そういうボランティアもいろいろあるんだということだと思います。

最後の教育のところ、学校内部のことは私はわかりませんけれども、今でも現に、教育、例えばお裁縫とか昔習ったようなことを、お母さん方が毎日来て、あるいはスポーツなんかでもそうですね。授業の中にも入ってきてもらって、バレーボールを教えたりとかということをやっている学校も現にあるわけですし、教師だけではなくて、地域の中で育てるという中で、いろんな形のボランティア活動を学校が受け入れていくというような方向になるのではないかと思いますけれども、私のほうからはちょっとその辺までしか言えないと思います。

【松下会長】

松井委員、よろしいですか。

【松井委員】

わかりました。

【松下会長】

ほかにございますか。

なければ、私がちょっと言いたいんですけれども、今のボランティアの話で、松井委員のほうからもちょっと話があった、有償の場合もあるでしょう。いろいろ電車賃を出すとか、区で現実にやっていることがあるでしょう。それがどういう基準かというのが、私自身もわからないんですよ。

というのは、実は一つ例を出しますけれども、子供会の役員さんをやっている人に私は文句を言われたことがあるんですよ。「松下さん、子供会の役員、それはボランティアだから、幾らでもやりますよ、地域のことは」、ところが、子供会のいろんな活動報告や何かで、支部長あたりを月に一回、文化センターなどに呼ぶんですね。そのときに、駐車料金も払い、時間も忙しいのに行かなければならない。それはまあいいけれども、「駐車料金ぐらい何とかならないの」と、大分文句を言われたことがあるんです、実は。私はやっぱり区が要請をする、お願いをするような、例えばさっきの通訳もありますね。通訳も、ゴスフォードからお客さんが来たときに通訳を頼みたいというときにはボランティアをお願いするけれども、その人が一緒にいろいろ案内して、お昼ご飯をゴスフォードの人に食事をごちそうしたときに、通訳だけはごちそうしない、あんた、自分で食べなさいというのじゃ、これは私はやっぱり出してあげるべきだと思うの。つまり区が要請したものは、ある程度やってあげなきゃいけないという感じが私はするんですけれど

も、何かその辺の基準が、現在はわからないんですよ、どこでどうなるか。
本来、ボランティアというのは無償ですね。だから、見返りは要求はしないと思うんですけれども、あまり再三やられると、例えば子供会の人は、子供会のことを一生懸命やっているんだけれども、それが役員になると、ちょいちょい呼ばれるんですよ。やれ区民まつりの相談があるから来いとか何だと来ると、そういうふうなことで不満が出てることが実はあるので、ボランティア、せっかくそういう気持ちがある人を育てなければならないので、その辺のところは検討することが大事だと思うんですけれども、その辺の考え方はどうですか。

【長田学習・スポーツ振興課長】
まず、区少年団体連合会のお話でございますけれども、区少年団体連合会につきましては、各単位子供会への助成とか、支部への助成、14支部ございます。さらには、育成者への助成、そういうことで助成をしております。

【松下会長】
わかっています。わかっていますけれども、そういう人たちは、結局子供のためにそれを使うというのが基本だから、そういうものには使いたくないというんですよ。要するに自分たちがわざわざ行くのにはそのお金は使わないで、それはあくまでも子供のいろんな行事に使いたいというんです。だって、8万円とか、4万円とか、少ないですね。それを1年間でやり繰りしているんです。それはわかっていますよ。だから、基準がいろいろあると思うので、その辺も整理するといいですね。

【白井副主幹】
今ここでちょっとお答えできないんですけれども、そういうものを受けまして、これからほんとうにボランティア立区というのに本気で取り組んでいきたいと思っておりますので、そういう形で、いかに一人でも多くの方がそういうお気持ちを、善意の循環という言葉がございますけれども、まさにボランティア立区というのは善意の循環がいかにできるかということだと思っておりますので、そのようなことを一つ一つ、今会長がおっしゃったようなことをつぶしてまいりたいと思っております。

【松下会長】
ＰＴＡの活動もそうですね。ＰＴＡの研修会もやるけれども、ＰＴＡは逆に今度は助成してないですから、それなのに会長さん以下、皆さん、やっている人はわかると思いますけれども、グリーンパレスへ呼んで、その費用、帰りの食事だって、結局会長が出しているのが実態じゃないかと思うんですけれども、そういういろんなことがあるんです。
それは別にして、一つだけ早瀬先生にお聞きしたいのは、先生はもう三十何年、中里前区長の施策を全部研究して、区のまちづくりを執筆された方ですから、江戸川区のことは隅から隅まで全部、今までの経過はわかっていると思うんですね。そうなりますと、江戸川区の非常に細かいことまですべて熟知している先生がこれを考え方として立ち上げていただいたので、ほかの自治体にはないような江戸川区の特色があると思うんですけれども、どういう特色があって、その特色はこれからもどんどん伸ばしたほうがいいよというふうなことでもありましたら、ちょっとお聞きしたいんですけれども。

【早瀬委員】
なかなか答えにくいというか、熟知しているといっても、かなり前の取材であれなんですけれども、前区

長のことをこんなところで言うのもあれですけれども、要するに東京23区の中で、東京都江戸川区と言われるのを嫌がった人でしたね。江戸川区だ。東京都なんかつける必要はない。職員の採用も独自採用とか、要するに独自性、オリジナリティーを出すことが、異常なくらいと言っていいぐらい、あった人だと思うんですね。

前区長のころは、日本の経済もずっと上り、上り、上りということで、いろんなことが手を打ちやすかった。例えば東京都とけんかしてでも、国とけんかしてでも、やろうということはやる。今は時代もそういう時代ではなくて、国とも東京都ともほどほどに仲よく、東京都知事もかなり変わった、オリジナリティーのある人ですし、要するにけんかしながらでも独自性を出すということはなかなか難しいと思うんですね。それと、ある程度安定というか、横にずっと平行飛行みたいになってきていますね。前区長は日本経済のいい時期に、いろんなことをやろう、いろんなことをやろうとやってきた。今はむしろできるだけそれを落とさないように、平行してずっといこうということだろうと思うんですね。

僕らの部門で言いますと、とにかく江戸川、江戸川というのを何かやりたいというのはすべての出席者にも基本的にあったと思うんですね。ボランティア立区というようなことも、つまり全部がボランティア、何かの形でやるんだということも、いずれ僕は日本中なると思うんですけれども、できるだけ早くそれを江戸川が先にやるんだということを打ち出したい、それがボランティア立区という言い方に出てきたと思うんですね。ボランティア立区というのが言葉として本当にいいのかどうか、ちょっとわからないんですけれども。

それ以外の、最初の生涯学習も、どこもやっている。どこもやっているけれども、何かどこもやってないこと、どこまでがそうなるかわからないけれども、とにかくよくも悪くも横並びにはしたくない。独自性というのを江戸川区の伝統としてなるべく生かしたい。ただ、それは現実には非常に難しいかもしれない。さっきの大学構想の話にしても、いろいろ難しいかもしれない。だけれども、気持ちとしては、何かオリジナリティーを出したい。どっちみち一緒になるのなら、早く打ち出したい。つまり20年先のことだけれども、今から打ち出すことによって、よそに先駆けることができたらいいなと思うんですね。

だから、江戸川区というのは、さっき海と川というあれもありましたし、それから都心から近いとかいろいろありますけれども、前区長のときからそうでしょうけれども、ここに住んでいることを誇りにするといいますか、いいところに住んでいると。東京というと、世田谷とか杉並とか、そういうところが昔は山の手みたいな感じで、このごろそういう意識はあまりないと思いますけれども、そういうあれがある。そういうようなことに対して、江戸川というのは何となく下町というか、僕なんかも「都内に行く」というようなことを、都内なんですけれども、ここへ来て間違って言ったりしたこともありました。そういうあれが、例えば地下鉄が通ったり、いろいろ変わってきていますね、東西線とか都営新宿線とか。東京都の中でいろんな動きのある中で、江戸川がどういうところを見据えていくのかというようなこと、これまでのようなほんとうの独自性だけを出すということは難しいと思うんですね、実際は。だから、これまでのよさを壊さないように、横ばいかもしれないけれども、行く。いずれ全部やるなら、なるべく早く打ち出すことができたら、そういうふうに思います。何かちょっと言葉が足りないかもしれないですけれども。

【松下会長】

ほかにございませんか。座長が大分話しちゃって、済みませんでした。どうもありがとうございました。

それでは、審議日程について、事務局のほうから提案がありますか。

【白井副主幹】

第10回でございますが、先日、11月20日でお願いしてあったわけでございますが、諸般の事情がご

ざいまして、まことに申しわけないんですが、11月26日の月曜日に変更させていただきたいと思います。よろしいでしょうか。お願い申し上げます。皆さんには表でもう20日のほうをお渡ししましたが、今、もしよろしければ、新しい表をお渡しさせていただきたいんですが、よろしいでしょうか。では、それでよろしくお願いいたします。時間は1時半でございます。グリーンパレスではなくて、区民ホールのいつもの蓬莱の間になりますので、そちらのほうに書かせていただきましたが、線を引かせていただいているところでございます。よろしくお願いいたします。

【松下会長】
11月8日だけがグリーンパレスですね。

【白井副主幹】
さようでございます。

【松下会長】
11月8日だけがグリーンパレスの孔雀の2で、あとは、今のところ、こちらの区民ホールです。よろしいですね。　その他で何かございますか。なければ、本日はこれをもちまして、閉会とさせていただきます。どうもありがとうございました。

――了――